

自分の足下を掘れ

2021.5.24

「与えられた仕事をコツコツと地道にやり続けた先に自分にしか到達できない泉がある」この言葉の大本は哲学者のニーチェである。明治の文芸評論家である高山樗牛は、この言葉を「己の立てるところを深く掘れ、そこには必ず泉あらん」と訳している。

作家の宮本輝は、次のように言っている。

足下を掘れ、そこに泉あり、という言葉がありますが、皆、自分の足下を掘っていったら、必ず泉が湧いてくることを忘れていて、あっちに行ったら水が出ないか、向こうに行ったら井戸がないか、と思っているけれど、実は自分の足下に泉はある。与えられた仕事をコツコツと地道にやり続けた先に自分にしか到達できない泉がある。

まるで私に向けて言っているかのような言葉である。若い頃の自分の国語の授業を思い出した。私は、自分の実践を発表する機会に恵まれてきた。自分としては、工夫して実践し、それを発表しているわけだが、どうもベテランの先生方の反応がよくない。受けがよくない。一方、若い先生方には受け入れられているように感じていた。そのときは、反応がよくない、受けがよくない理由がわからなかった。

年齢を重ね、実践を積み重ねていった私は、ようやくあのときの原因がわかった。私が工夫していたのは、指導法であって、うわべだけの表面上のことだったのである。ディベートをやってみました、群読をやってみました、ジグソー学習をやってみました。まさしく「あっちに行ったら水が出ないか、向こうに行ったら井戸がないか」である。「やってみました」のオンパレードである。いったい打ち上げ花火を何発上げたのか。

授業の本質というものがわかっていない。ベテランの先生方が眉をひそめるわけである。私の発表を聞かされて、さぞや苦痛であったことだろう。申し訳ないことをした。すべては未熟であった。私に何が足りなかったのか。教材研究である。教材と正面から向き合う姿勢である。

このことに気がつくのに時間を要しすぎた。教材研究が浅いために、学習課題や発問が吟味されていない。だから、生徒がじっくりと考えることができない。それを小手先の指導法でごまかしていたということだろう。一見、活発で楽しそうな授業であったかもしれない。だが、そこに深さがあったかという、甚だ疑問である。

今では、自分がベテランとなり、若い先生方の実践を聞いていて、思わず眉をひそめることがある。そして「ああ、昔の自分だ」と思ってしまうのである。

「与えられた仕事をコツコツと地道にやり続けた先に自分にしか到達できない泉がある」とは、国語の授業で言えば、コツコツと地道に教材研究を積み重ねた先に、深い学びを伴う授業があるとしてもなるか。決して楽ではなく、ゴールの見えないいばらの道である。だが、教員は、やはり泉を目指さなければならない。しっかりと自分の足下を見ながら。